

第97回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2017年7月10日(月) 14時～17時

兼題「夕立、白雨」

- 川井素山 ○玻璃戸拭き薔薇の彩り引き寄する
山門の木目 著^{しる}き夕立あと
夕闇にうすむ白帆や遠花火
大道芸見入る親子や梅雨晴間
- 保井寶正 ○墨堤の船にたばしる驟雨かな
出目金や読心術の語り合ひ
夏大根辛さを涼に夕餉かな
塔のかげ浮葉を入れず東寺かな
- 後藤克彦 ○じゃがいもの花花花の十勝かな
梅雨明けの貸し傘残る無人駅
炎昼や誰れもが黙すバスの旅
大夕立軒で腰据え読書かな
- 佐久間喬 ○薙ぎ倒す青き匂ひや草刈機
梅雨寒や薄着で出掛け熱を出す
大夕立土に砂にもいさぎよく
焼酎や今日の本音は腹の中
- 丸山酔宵子 ○紺碧の空に雲あり山法師
露天湯や傘を突き刺す大夕立
雨上り夕焼けに浮かぶ七変化
雨に耐へ朽ちた薔薇や二三片
- 菊地崇之 ○炎帝を惑わす衣透きし肌
節約に細身も得たるバナナかな
白雨来て狂い咲きかや終世紀末^{おおとしま}
白まじる乱れ髪かや半夏生
- 吉田啓悟 ○一陣の風に鷺草飛びたてる
川床料理さざなみの中ぼんぼり灯^{ゆか}
茶室へ通じる道に水を打つ
夕立の前と止む迄寡黙なり

- 青木英林 ○合歡の花媚葉の如き風情あり
蛍飛ぶ誰^たの魂の化身かな
子等去りし浜に一面月見草
夕立や渴いたる畠潤せり
- 佐久間たか子 ○大夕立駅なかカフェに長居せり
藍ゆかた上げ髪香り風の中
白肌の薬味にそまる冷やっこ
追想の琥珀梅酒に酔ひしれて
- 山本草風 ○夕立きてすぎ去るまでの逢瀬かな
父の日に父の写真に嗚呼合掌
紫陽花と競ひて化粧やり直す
五月晴れ行き交う女^{ひと}の香^{かおり}嗅ぐ
- 金森純女 ○後れ毛のいつしか濡れし夏の霧
半夏雨たんぼの畔^{くろ}に老爺をり
白シャツの似合わぬ年になりにけり
モネの傘やまとのゆだち降りしきる
- 佐伯兵庫 ○凶みくじ夕陽に踊る夏柳
夕立や恋が生まれる雨宿り
カンクンビーチ食い込む水着細める目
紫陽花や雨なきは憂しおじぎする
- 渡辺鯨波 ○白雨来る島のはずれの流人墓地
炎天やゴリラの胡坐定まらず
新樹光朝の服薬忘れまじ
古書店のワゴン消え去る大夕立
- 澁谷瑠璃 ○夕立よ吾の虚飾を流し去れ
気の抜けた二人の午刻ソーダ水
小瑠璃でも大き幸福運びたる
湯煙に姿隠さる星涼し
- 石川智子 ○水草に雨宿りして金魚かな
宵花火背中に伝ふ鼓動かな
夕立のけぶりにたえて路地の花
夕立に身を隠してや傘の中
- 原 晶如 ○白南風や少年の手に砂鉄立つ
夕立や椅子引き寄せるカフェテラス
魚飛んで海のカルデラ舟遊
水馬軽きにゆがみ水鏡

青葉ひかる ○紫陽花の香り漂ふ乙女子よ
夕立ちて水玉模様の浴衣かな
昼下がり緑光りて笑顔とぶ
休日の広場で幼子駆け回り

次回「萩句会」

8月は休会です。

日時 2017年9月11日(月)14時～17時

場所 下目黒住区センター第二会議室

兼題 『野分、台風』一句 当季雑詠三句 計四句